様　式　Ｆ－７－１

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成２５年度）

1. 機関番号　3 2 6 0 4

2. 研究機関名　大妻女子大学

3. 研究種目名　基盤研究(C)

4. 補助事業期間　平成２５年度～平成２７年度

5. 課題番号　2 5 3 8 1 1 4 0

6. 研究課題名　社会的排除と包摂の観点からみた高校中退問題に関する研究

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
9 0 2 1 1 9 2 9	サカイ　アキラ 酒井　朗	教職総合支援センター	教授

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
3 0 1 7 3 5 7 9	ホサカ　トオル 保坂　亨	千葉大学・教育学部	教授

9. 研究実績の概要

研究計画に従い、2班に分かれて作業を遂行し、研究会を通じて知見を共有していった。そのうちの１つは、ある自治体の福祉行政の協力のもとに、同自治体に暮らす被保護世帯のケースファイルに基づいて、被保護世帯の子どもの中学卒業後の多様な進路を描こうと試みた。
調査対象者400名弱の進路と基本的属性について分析した結果、以下の諸点が明らかにされた。①対象者の約8割は単親世帯であり、その大半が母子世帯である。母学歴は、高校中退者と中卒が約3割、高卒が4割を占めていた。②高校進学率の平均が98%にも達する中で、調査対象者のうち高校非進学もしくは高校中退者が2割を占めた。また高校非進学から教育機関に改めて戻ることはきわめて難しいことも浮かび上がった。③19歳以上の約150名を対象に集計を行ったところ、調査時点での大学・短大進学率は18%であった。また、これをもとに数名の高校生に対してインタビューを開始した。
この調査と併行して、通信制高校について、高校教育への包摂の観点からその現状を分析した。とくに注目したのは、公立通信制高校と近年急増している私立通信制高校の特徴である。公立通信制高校は服装や生活態度に関する指導は必要最低限に抑えられ、人間関係上のトラブルが起きにくい。ただし、こうした高校では、教員が積極的な支援を必要としている生徒を発見し、支援することが困難であることから、自律的に学習を進められない者が卒業できる見込みが低い。
これに対して、私立通信制高校では学習支援から生活指導に至るまで、積極的な介入によって生徒の学校生活を支援し、卒業まで導く。ただし、積極的な支援や指導が馴染まない成人や非行傾向のある生徒、私立高校の学費を支払うことが難しい生徒は、入学の段階で排除されている点に留意が必要である。以上のように通信制高校には大きく２つのタイプがあり、それぞれの機能の異なることを指摘した。